

日本野生動物医学会主催第 15 回 WAMC - SSC 実施報告

今井 薫（酪農学園大学獣医学類 2 年 / 日本野生動物医学会学生会酪農学園大学支部）

浅川満彦（酪農学園大学獣医学群 / 同大野生動物医学センター WAMC 施設担当）

今年も日本野生動物医学会主催 SSC が酪農学園大学野生動物医学センター WAMC に委嘱された。学会が主催となる SSC としでは、今年のものが最後となる。次年以降については未定であるが、この SSC に実施・参加した方々から、継続を望む声が少なくないことも再確認された企画ともなった。慎重に検討したい。

（文責 浅川）

以下、本 SSC の詳細な報告は SSC 運営委員会を代表し、今井が行う。今回の SSC に参加して下さった方は、以下の 2 名（WAMC・SSC の第 38 および 39 番目）で、それぞれから送付された参加報告は本文末尾に掲載した（敬称略）。

宮崎大学農学部獣医学科 2 年 筒井 静（女性）

岐阜大学応用生物科学部共同獣医学科 2 年 冬木愛実（女性）

研修は例年通り、浅川教授（本学獣医学群）が座学を、WAMC 所属のゼミ生のうち獣医学類 4 および 5 年生（注：浅川ゼミでは研究室演習の一環として参加が義務）が実習を、それぞれ担当した。当該ゼミ生は以下の通りである。

4 年 太田素良，三部優輝，高木龍太，鈴木夏海，丸山雄嗣

5 年 中澤美菜，石島栄香，西 春季，吉岡美帆

また、こちらも例年通りであるが、本学会学生会本学支部（通

称ルウェ）のメンバー有志が参加者への生活面支援を担当した。

1 年 足立咲子，大塚留希，森本 建，柿本美祐，伊藤実優，木村圭吾，高橋慶一

2 年 今井 薫（SSC 担当代表），増 星来，大杉祐生

3 年 菅原紗彩，石原舞琳，松倉未侑，林 美穂

6 年 松根和輝

この他、野幌森林公園をフィールドに行われたセンサス実習では、元ルウェおよび本学野生動物生態研究会で、現獣医学類 5 年 大橋雅英および小亀 瞬にご指導頂いた。本 SSC は日本野生動物医学会（2003）で提示された「望ましい実習項目」の「基本コース」および「応用コース（Ⅲ）」の一部を基盤に、野外疫学 field epidemiology の視点を涵養することを目的としたもので、医学会主催の開催は本年度が最後となる。参加者は座学と実習をバランス良く取り入れた実践的な学びの中で、この野外疫学の視点を身に着ける。具体的な内容としては、酪農学園大学敷地内の野外フィールド視察に始まり、WAMC での関連分野の講義、麻酔用吹き矢の作製と使用法の実習、哺乳類および鳥類の剖検、WAMC に隣接する野幌森林公園地帯内の野外実習（センサスと捕獲）などが組み込まれている。今回は某動物園から提供された大型哺乳類検体をゼミ生指導のもと剖検を行った。開催年によっ



写真1 フィールド視察（左：本学中央館屋上からキャンパスおよび周辺森林全体像を観察，右：酪農学園大学敷地内を散策）



写真2 WAMCにおける講義風景の一コマ



写真3 ゼミ生指導のもと麻醉用吹き矢製作実習（左）とその試射の模様（右）



写真4 合宿所における食事風景（左：食事の様子，右：ルウェのメンバーによる食事準備）



写真5 野外調査（ラインセンサス）実習



写真6 WAMC 入院室 / サンプル室における剖検実習
(左：哺乳類, 右：鳥類)



ては、SSC 期間中に搬入された WAMC 入院中の傷病野生鳥獣のケア飼育や有害捕獲個体などの対応を行うこともあったが、今年はそのような飛び込み的事案は無かった。しかし、今年は約 80 年ぶりに野幌森林公園内でヒグマが確認され、この森での研修についての実施は、不透明であった。ところが当 SSC の直前、この森と周辺域に寄り付いていた当該個体が有害捕獲されたことから、安全に留意しつつ全日程を実施した。以下、時系列に沿ったビジュアル的な写真とその説明文を示した。

なお、本 SSC は本学正規の課程では扱わない分野の講義・実習で構成されているため、それを垣間見、あるいは一部参加をしたサポートメンバーにも有益であったという。また、様々な夢を抱いた参加者・ゼミ生・ルウェのサポートメンバーが交流する機会でもあった。このようなことから、次年以降も本 SSC の継続を望む。最後になるが、ご多忙の中 SSC を開催していただいた浅川先生およびゼミ生の方々をはじめ、関係者の皆様にこの場を借りて改めて御礼申し上げる。(文責 今井)

■参加者からのレポート

筒井 静(宮崎大学農学部獣医学科 2 年)

私は「なにか動物にかかわる仕事につきたい」という思いから、獣医師を志すようになりました。獣医学科受験を決意した当初は、殺処分を減らすことへの思いが強く小動物臨床に進むことを考えていましたが、次第に園館で飼育されるような動物や野生動物への興味が強くなり、現在は園館の獣医師になることや野生動物の保護にかかわる仕事に就くことを目標とするようになりました。ですが野生動物の保護で行われていることや課題についてはあまりよく知らなかったもので、はやいうちに実際に経験することでそれらについて学んでいきたいと思い、今回の SSC に参加しました。

実習では野生動物による農業被害の現場の視察や鳥類に対するラインセンサス法、小型哺乳類の野外調査、野生動物の解剖などを行いました。どれも大学の講義では扱わなかった内容を含むものばかりで、とても新鮮で野生動物分野をより深く知る良いきっ



写真7 浅川教授宅での懇親会(左)およびWAMC 玄関での修了証書授与および閉会式(右)

かけになったと思います。野生動物の解剖では、ツツドリをはじめとする野鳥やワラビーの解剖を行いました。座学や実習で学んだことと比較しながら解剖を進めることができたのでとても充実した実習になったと思うと同時に、すでに忘れかけている知識が多いことも分かったので、一度学んだ内容は適宜自主的に復習したりより理解を深めていく必要があることを痛感しました。

また、浅川先生の講義やゼミの先輩方による講義をうけたことで、野生動物分野の現状や課題を詳しく知ることができとても有意義な経験になったと思います。浅川先生による傷病鳥獣の救護に関するお話が最も印象的で、「人間の活動によって理不尽に傷つけられた動物を助けたい」となんとなく考えていた自分の浅はかさを知り、ではどうしたらそのような事例を減らすことができるのかなどを考えるきっかけとなりました。ゼミ生による爬虫類に関する講義も興味深く、今まであまり関心がなかった爬虫類についての知識も増やしていきたいと思うことができました。

また私にとって、ゼミの先輩方やルウェの方々の希望する将来の進路や考えにふれることができたのはとても貴重な経験だったと思います。自分があまり意識していなかった獣医領域について

知るきっかけとなり、自分の興味のある分野に関しては新たな考えを発見することができ、皆さんの意識の高さと行動力に圧倒されました。自分も園館の獣医師になるだけでなく、園館の獣医師になって何がしたいのかということまで改めてしっかり考える必要があると気づかされました。

今回の SSC に参加したことで、私は野生動物分野に関する現状や課題について考えを深める機会を得ることができ、また実際に手を動かして様々なことを経験することができました。この SSC は野生動物分野に関心のある獣医学生にとって、この分野についてより深く知りたくさんの実習を重ねることができる数少ない貴重な場になっていると思います。なので今回をもって野生動物医学会が主催する SSC が終了してしまうのはとてももったいなく思い、参加者としては是非今後も続けて頂きたいです。

最後に、SSC を主催していただいた浅川先生、実習中つきっきりでいろいろなことを教えてくださったゼミ生の方々、生活面で4日間サポートしてくださったルウェの方々にこの場を借りて厚くお礼申し上げます。

冬木愛実 (岐阜大学 応用生物科学部共同獣医学科 2 年)

私が輸入爬虫類や野生動物に感染する寄生生物について調べていたとき、浅川先生の論文をいくつか目にすることがありました。SSCに参加したのは、もともと野生動物全般に興味があるというのもあり、また当日は言いそびれましたが、野生動物と寄生虫学を専門とする浅川先生に会ってみたかったためというのもありました。

SSCの4日間、とても有意義な講義と実習を受けることができました。実習はフィールドと農作物被害現場の視察、吹き矢の作製と実践、鳥類のラインセンサス、小型哺乳類の野外調査、動物園動物や野鳥の計測と解剖、サンプリングを行いました。

野外調査実習ではアカネズミやヒメネズミを観察しました。この実習では、調査器具の設置と洗浄の際に先生が調査器具の構造を解説して下さい、かつ自分で一度は分解・組み立てを行う機会があり、構造からよく理解でき、実地的な調査器具の取り扱いを習得できることを重視している実習だと思いました。解剖およびサンプリングの実習では、遺体の詳細な外部計測および、寄生虫などの検査のために遺体の各所からサンプルを採取する段階も体験することができました。

講義の1つに対しての感想ですが、傷病鳥獣を救護する際にその個体の獣医学的基礎情報、生息地や環境の情報を得ることができるといったように、救護活動にも個体を助けるだけではない意義を持たせることができるということに踏み込んでいるのは面白いことでした。放鳥・放獣後に多くが死んでしまうとされる個体の救護よりも周囲の環境を保全するほうが重要という意見もある一方、やり方次第で救護についても保全上の意義を高められることは注目したいところです。

浅川先生によれば明らかに交通事故のような人為的な原因で死傷した個体であっても、それ以前に何らかの疾患で衰弱していたために事故につながった可能性も考えられるということでした。自然環境中の動物の状態について考察するには動物の体内事象に通じる獣医学分野の力が発揮されることが必要であり、生態系や野生の動物について多面的に知り、保全に取り組むためには、保護された個体から得られたデータの活用がより進められるべきであると思いました。

このSSCで多くの人々が関わって下さり、良い交流をすることができました。野幌森林公園の夜間散策は熊の影響で中止になってしまいましたが、合宿所でも多くの人と話ができて、それぞれの目指す方向性とそのために取り組んでいることについて聞け

たことがとてもおもしろく、良い刺激になりました。ゼミ生の方の講義も面白く、実習でも根気よく指導していただいたので自分で吹き矢の作成や外科結びに挑戦することができました。また、生活面のサポートをして下さるルウェの皆様のお陰で多くの時間を講義と実習に充てることができました。皆さま、本当にありがとうございました。